

有森 信二

足元に、油蟬の死骸を見付けた。

油蟬は六本の足を立て、羽をすぼめ、仰向けに転がっている。目には、涼し気な櫂の葉の翻りを映して。

ほんの一時間前、門口の櫂の幹に、体ごと埋める恰好でとまっていたやつだ。

なぜなら、その時刻に健治は、決定的な失態をやらかしている。三叉路で留美子や末広と別れ、大急ぎで玄関をくぐりトイレに走り込むつもりが、間に合わなかった。半ズボンを膨らし、水滴はズックに流れ込んだ。その様を、留美子たちに見られやしなかったか。恥ずかしさの余り、櫂の根本を、濡れたズックで力まかせに蹴り付けた。そのとき、鼻先に油蟬が一匹蹲っているのを見付けたのだった。

焦げ茶色のそれは、宙に飛び立とうとでもするのか、前脚をにわかにな立て、幹を蹴ろうと五ミリぐらい匍匐前進しようとしたが、そのまま元の位置に戻り、体を丸めてしまった。

お前見てたんだなと、健治は櫂の根本をもう一度蹴った。枝が空をジグザグに揺き回し、大きく揺れた。葉の鳴る音に驚いたのか、油蟬はビクリと体を震わせ、木肌にひ

しと張り付いた。

もう留美子たちは、学校に着いている筈だ。

去年からの担任の八重子先生の通夜が、六時から始まる。放課後に飛び込んで来た急な話だったので末広がが意見をまとめ、五時に学校に集まることになった。

来れるやつだけでいいさ。級長の末広は、一人頷いた。

留美子は、「八重子先生に付きつきりです。ピアノを教えてもらったんだもの、必ず行くわ」と言った。

まだ間に合うかもしれない。健治は走り出そうとして、半ズボンの前を押さえた。が、どうにもたよりなかった。普段着の柄パンに履き替えてみたが、尻のポケットが破けていたし、初めて聞く通夜という名前の重苦しさがそうはさせなかった。

八重子先生は、学校では一番若い。確か、建治たちのクラスが初めての担任だと言っていた。大学病院に入院したのが夏休み前だったから、まだ二か月にしかならない。経過はともいといいと聞いていた。まさか、今日死ぬなんて思いもなかった。

意を決して門口に出て行ったとき、健治は足元に転がっている油蟬を見た。油蟬は昨日など、この櫂の枝にいて、放逸とも思える鳴き声をたてていたし、幹に食い込みそう

なほど激しく体を打ち付けていた。つい先刻、健治が力まかせに根本を蹴り付けたときさえ、間髪を入れず、針金に似た前脚を動かしたのだった。

このわずかの刻の間に、何かが彼の身から出て行ったのだろうか。いや、何かが彼の身を新たに包んだのだろうか。

油蟬の体に、蟻が群れ始めている。蟻たちは、その小さな口で鎧の下の体を噛み千切り、行列をなし、巢へと運んで行こうというのだろう。次には、バクテリアが背中から腹にとりつき、蟻の残した骸をじわじわと溶かし始めるのかもしれない。

健治の頭を、妄想が次々に過ぎった。

八重子先生の得意なタンバリンの音が、響きわたる。留美子のピアノに合わせ、みんなが歌う。明るいメロディーが、留美子の指先から次々に生まれ、喉をふくらませ、スキーの曲を歌う。山の曲や、花の曲を歌う。

八重子先生は、みんなをその気にさせるのがうまい。八重子先生は、「素足のままでいいのよ」と言った。「今日の分だけ頑張ればいいのよ」と言った。みんな、八重子先生が大好きだ。

しかし、健治は、クラスで恐らく一人だけ、八重子先生の目に涙を流させた。

スケッチ大会で、画面いっぱいには鶏を描いた作品を選び、健治には内緒で推薦してくれたのだ。それが、学校でただ一人入選した。八重子先生が嬉しそうに、みんなの前で、健治に賞状を渡そうとした。先生は青色のワンピースを着ていた。しかし、健治は「いらん」と言った。おまけに、「青色の洋服が大嫌いだ」と叫んだ。

健治は、家でいつも怒られていた。「長男だから、もつと家の役にたたなきゃいけないだろ。弟妹も控えとる。愚図だ。気が弱い。体が弱い。手が鈍い。百姓だから、勉強なんぞほどほどでいい。本当に気がきかんのだから」などと毎晩説教された。

だから、みんなの前で褒められることになるなど、信じられなかった。「いらん」と言うとき、動悸が激しく打ち、口が乾き、目の前に青いもんぺの母が立ち塞がったのかと思っただ。

とうに六時をまわった。

八重子先生は、どうしているだろう。なにが、八重子先生のうちから抜け出て行ったのだろう。あるいは、なにが八重子先生を包み込んだのだろう。

きっと、留美子たちが八重子先生を囲んで涙を流しているに違いない。通夜というものがどういものか知らないが、今は誰の声よりも高く、「青色の洋服が一番好きだ」

と叫びたかった。健治は、目の前に垂れている櫛の葉を力まかせに耂りとると、尻の穴に思い切り力を込めスタートをきった。

はじめ、乾ききらない半ズボンの湿りが気になり、ズツクのぬめりが気持ち悪かった。しかし、三叉路まで来たときには、あたりの音は何も聞こえなかった。雑貨屋の親父が呆けた顔で通りを眺めていたが、かまわず傍を走り去った。

「みなさんが来てくれましたよ」

八重子先生の母が、先生の耳元で静かに囁いた。

「みんな、ありがとう。わかってるわ」

眠ったままの八重子先生が、ふっと微笑んだ。

「本当に急でした。でも、苦しんだりしてはいないんですよ。前の晩は、学校に帰ったら一番にしなければならぬこととは言い、アルバムの写真を眺めながら、上機嫌でずい分長いことお喋りし、遅くまでお茶をいただいたりしてたんです」

理科の時間に、八重子先生は、生命の誕生というところで、激しい爆発によって生まれた宇宙空間の火球の一つに、長い長い時間を経て、原始生命が誕生したと言った。さらに、長い長い時間を経て、ぼくたちが誕生したと言った。

それは、わかる。しかし、消え失せてしまう八重子先生は、どこに行くのだろう。どこへ行くこうと言おうのだろう。

「先生は一人じゃないわ。たくさんのお友達と一緒に心配することなど、何もないのよ。今のままでいいのよ」

健治の胸の中で、八重子先生の声が微かに鳴った。

白い着物の上に、退院したらみんなに挨拶するときのために準備していたという、新しい青い洋服が掛けられていた。

留美子が泣いていた。末広も肩を震わせている。みんなの姿を見、八重子先生に掛けられた青い洋服を見詰めているうちに、健治もしゃくり上げずにはいられなくなった。

みんなと三叉路で別れ、健治は門口の油蟬に目をやった。死骸の腹から、途絶えることなく小蟬が出て来ては次々と交代する。蟻たちが群れをなしているというのに、油蟬は針金の前足一本動かさずともしない。目には相変わらず、楓の葉の翻りを映したままで。